

「リーヴィスと文化」についての覚え書き

石原 浩澄*

はじめに

ひとりの作家をめぐる評価が確立される背後にはどのようなメカニズムなり状況が存在するのだろうか。英国の作家 D.H. ロレンス (D. H. Lawrence, 1885-1930) についての研究をすすめていく過程において、このような問題関心を抱くようになった。『虹』(*The Rainbow*) や『恋する女たち』(*Women in Love*) などロレンスの代表作の研究・批評文献に目を通してると、批評史の冒頭近くに F. R. リーヴィス (F. R. Leavis, 1895-1978) の名前は出てくる。ロレンス批評の成立、あるいは評価の確立過程に関心をもち、初期の論考や批評史を概観した文献に接していると、「ロレンス・リバイバルはリーヴィスから」と言っても過言ではないくらいに、リーヴィスの影響が大きかったことに言及しているものは多い。作家の評価確立には、ある時代特有の、文学・思想のみならず、さまざまな複数の要因が複雑に絡み合って作用していることは想像に難くないが、本稿はそうした多様な要因の一隅を占めるであろう批評家に焦点をあてるものである。リーヴィスを経由することは、「ロレンス・リバイバル」の一側面を歴史的、思想的な文脈の中において理解するうえで必要な作業のひとつではないかと思う。ロレンス批評はリーヴィスの言論活動の大きな一部分を占めていたことは間違いないからだ。英文学の教師であったリーヴィスの主要な活動は、文学教師・文芸批評家としてのそれであるが、それはリーヴィスの幅広い文化・社会に対する考えが

* いしはら・ひろずみ 立命館大学法学部教授

反映されたものである。この意味で、リーヴィスのロレンス文学批評は彼の文化・社会批評におけるケーススタディとしてとらえることもできるであろう。以下に見ていくように、言語使用としての文学を、文化の典型的な形態ととらえているリーヴィスを確認することができる。

本稿は、リーヴィスのロレンス批評そのものは射程外となるが、冒頭で述べたように、それを出発点として認識しつつ、リーヴィスの文化についての言論を整理してみるとともに、それを先学の洞察に依拠しながら、いくつかの文化をめぐる言説・文脈の中に眺めることで、彼の言論活動を相対的に位置づけようとする試みである。

I. リーヴィスの文学批評——文化論との関連から——

まずここでは、文学批評に関心を寄せる理由、あるいは、文学批評の重要性を述べる中で、現代社会批判をしているリーヴィスに注目してみたい。よく知られた初期の著作に『大衆文明と少数派文化』(*Mass Civilization and Minority Culture*, 以下 *MCMC* と略記する。FC 193)¹⁾ という小冊子がある。この中でリーヴィスはいわゆる大衆文化が台頭してきた当時の状況について激しく批判的に述べ、伝統的文化が置かれた状況を「危機」(“at a crisis”)と表現している。なぜ危機的状況なのか。リーヴィスの説明はこうだ。同時期に D. トンプソンとの共著として執筆されている論考『文化と環境』(*Culture and Environment*, 1933、以下 *CE* と略記)も参照しながら見てみよう。リーヴィスによれば、20世紀初頭における映画、新聞(特に大衆紙)、広告、放送などの大衆文化の普及によって——これらをもたらす大量生産を可能にした「機械」を元凶とみなしているのだが——「標準化」(“standardization”)がもたらされる。これらの媒体は少しでも多くの人々に訴えることを狙いとしているからだ。標準化は必然的に「水準の低下」(“levelling-down”)を伴う。これらは「今日の文

明を特徴づける安価な反応 (cheap response) を意図的に食いものにする」(22) のだ。そして、機械によってもたらされた変化は過去からの「連続」に「断絶」を生じさせる。

It seems unlikely that the conditions of life can be transformed in this way without some injury to the standard of living (to wrest the phrase from the economist): improvisation can hardly replace the delicate traditional adjustments, the mature, inherited codes of habit and valuation, without severe loss, and loss that may be more than temporary. It is a breach in continuity that threatens: what has been inadvertently dropped may be irrecoverable or forgotten. (FC 17)

ここには、過去からの生活様式や価値が、機械化がもたらした大量生産を伴う近代文明の影響下で途絶えてしまうことに対する危機意識が表明されている。

このように、現代文化の状況に対する危機感を表明するのであるが、『文明』と『文化』は対立する用語となりつつある」(39) と言うように、ここでリーヴィスは「文明」と「文化」を明確に使い分けていることには注意しておきたい。むしろ対立概念としてとらえている。次の文の方がより分かりやすい。

The prospects of culture, then, are very dark. There is the less room for hope in that a standardized civilization is rapidly enveloping the whole world. (44)

大量生産によって「標準化」される近代文明のもとでは、文化の展望は

暗い。リーヴィスが考える「文化」は、便利さや快適さをもたらす文明とは異質のものである。²⁾

マシュー・アーノルドを意識しつつ、「文化」の定義が問われているのが現代である、と冒頭で述べているリーヴィスであるが、当該論考では——ところどころ、言語以外の要素を含めてこの語を使用しているところが見受けられるのであるが——「言語使用」として文化を定義している。「By 'culture' I mean the use of such a language.” 15) 言語とは、「繊細な生が依拠するところであり、また、それなしでは、精神の判別が妨害され、また一貫性がなくなる」(15) ものである。また、『文化と環境』の中では、「われわれの精神的、道徳的、感情的伝統」は「主として言語の中で伝えられる」(CE 81) と述べている。³⁾ そして、前述したように、このような言語を含めた文化全般が危機の状況にある。大量生産に裏打ちされた近代文明における広告や大衆紙、さらにベストセラー文学に見られる言語は、まさにそれらが大衆に向けられて発せられるがゆえに、「標準化」されたものとなる。ギルバート・ラッセルの『広告の書法』を引用するリーヴィスによれば、広告の機能とは、物質文明の原理と同じで、「製造業者が売りたいものを求めるように大衆を教育すること」(FC 36, Gilbert からの引用) であるのだ。近代文明における商品の標準化に似たものを、リーヴィスは文化の危機の状況における人間の標準化に見ている (CE 32)。

このように、標準化され、質の低下を伴った今日の言語（文化）における過去からの遺産との「断絶」を感知するリーヴィスが、過去との「連続」が保持されているところとして希望を見出すのは、「文学」しかない。

For if language tends to be debased [...] instead of invigorated by contemporary use, then it is to literature alone, where its subtlest and finest use is preserved, that we can look with any hope of

keeping in touch with our spiritual tradition --- with the “picked experience of ages.” (CE 82) ⁴⁾

リーヴィスが生きた社会／時代において、「文学」に向かう必要性／必然性はこのように説明されている。ところが、ことはそれで——つまり、文学を経験すれば——解決ではなく、ここでもリーヴィスは問題を見出す。つまり、正当な文学を識別し批評できる読者層の不在という問題である。たとえばワーズワスの時代と比較して、現代は読書の種類・量共に増大し、「判別」(“discrimination”) ⁵⁾ が困難な時代である (FC 31 参照)。「イングランドには、まじめな批評誌を支えるのに十分な、教養ある読者層 (public) がいないのだ。」(32) 正当な文学の「連続」／伝統を評価し受け継ぐのは「教養ある読者層」であり、文化を支えるのは、小冊子のタイトルが示すように「マイノリティ／少数派」である。冒頭部分でリーヴィスは、

In any period it is upon a very small minority that the discerning appreciation of art and literature depends: (13)

あるいは、

The minority capable not only of appreciating Dante, Shakespeare, [...] but of recognizing their latest successors constitute the consciousness of the race (or of a branch of it) at a given time. (14-15)

と述べている。文学／芸術を鑑賞・評価し、また現代におけるその継承者をも識別できる少数派が、民族の意識というものを形成するというの

である。そして、この識別力／判断力は決して天賦の才能ではなく、訓練によって獲得可能だという。しかし、それは環境に任せておくのではなく、むしろ意識的な教育が必要であると述べている。

We cannot, as we might in a healthy state of culture, leave the citizen to be formed unconsciously by his environment; if anything like a worthy idea of satisfying living to be saved, he must be trained to discriminate and to resist. (CE 5)

ここから、リーヴィスの大学教育における（英）文学教育、なかでも、知識の詰め込みに終始するのではなく、鑑賞・判断・評価に重きを置いた「批評」（“criticism”）実践の重要性が主張されていくことになるであろう。^{6）}この実践の中で、「基準」が確立され、それに基づいた優劣の判断、リーヴィス言うところの「相対的価値判断」が行われていくのである。

Ⅱ. 「マイノリティ文化」の系譜

前節で概観したリーヴィスの文学批評論／文化論の側面、すなわち少数派マイノリティが支えるものとしての文化論は、想像に難くないが、しばしばエリート主義や排他主義という批判を受けてきた。もっとも、「わたしは明白にエリートの訓練に関心を持っている（I am avowedly concerned with the training of an elite.）」（*Valuation in Criticism* 169）と言うリーヴィス自身、そのことには十分自覚的なのであるが。たとえば、1956年に、リーヴィスの傲慢さや独断的な論調を強く批判するプリーストリー（J. B. Priestley）は、

He never seems to be addressing ordinary sensible readers, men

and women of the world, as the great critics always did, but only an elect few, a shadowy elite, for whom alone Literature exists.

と述べて、リーヴィスの限られた狭い読者層の考え方、言い換えれば、エリート主義を批判している。類似の批判は、リーヴィスの執筆活動初期からすでに見られていた。『大衆文明と少数派文化』や『文化と環境』とほぼ同時期の1933年、『ロンドン・マーキュリー』誌上でブラウン（Wynyard Browne）は、「リーヴィスの『マイノリティ文化』の必要性や価値の価値に対する信念は、彼が推進する大儀に甚大な害を及ぼす」（445）と述べて、リーヴィスのマイノリティ文化論に批判的に反応している。

英文学教育・研究史上に一時代を築いたと言ってよいリーヴィスは多くの支持を得たはずであるが、彼の批評スタイルに関しては、その独善性や、大物作家をも遠慮なく一刀両断に切り捨てるような傲慢さなどによって、強烈な反発や批判を招いたことも又事実である。このことを確認しつつも、しかしながら、ここで注意しなければならないのは、こうしたリーヴィスに個性的な事柄に対する批判と並べて、彼のマイノリティ文化論が語られてしまうと、この問題——すなわちリーヴィスの文化観——までもがリーヴィスにオリジナルなものとしてとらえられてしまわないかという点である。つまり、マイノリティ文化を擁護し主張したのはリーヴィスのみではないということ。言い換えれば、マイノリティ文化論や大衆文明・文化批判の言説の系譜の中にリーヴィスを眺めることも可能ではないかということである。

1. 20世紀初頭における大衆論の状況

1992年、ジョン・ケアリー（John Carey）はその著書『知識人と大衆』（*The Intellectuals and the Masses*）において、20世紀初頭の、主に英国

における文人・知識人に見られた反大衆の傾向を描いてみせた。オルテガの古典的著書（『大衆の反乱』）に触れながら、大衆文化の出現は、大陸を含めたヨーロッパに広く共通する現象であったことを記している。（大衆の脅威を感じ取った知識人の間で、ある種のニーチェ人気が存在したことに触れているケアリーは、ニーチェの著述を、反大衆の言説の嚆矢ととらえているように見受けられる。）ことイングランドの情勢については、19世紀末からの一連の教育改革による初等普通教育の実践によって、前例のない読者大衆が形成されたことをひとつの背景としてとらえている。こうした大衆読者層からの需要を見込んで、*Daily Mail* 等のいわゆる大衆紙が登場し、「代替文化」（“Alternative Culture”）が形成され、これが旧来からの文化の主役を自負する知識人たちには脅威と映った。

このような大衆文化の台頭に危機感を持った知識人層による大衆（＝マス Mass）の表象のありさまを記述することをケアリーは狙いとしている。

先駆的に大衆嫌悪を表明したニーチェは、大衆を「動物の群れ」にたとえ、「マス」の「人間性の否定」を試みたという（24頁参照）。この非人間化された大衆像は20世紀のエリオットやパウンド、ウルフにも引き継がれていると言い、インジ（William Inge）の“The democratic man is a species of ape.”という発言を引用している。“The democratic man”とは、言うまでもなく、政治的民主化に始まり、普通教育制度等の恩恵を得て出現した、民主主義の産物としての「大衆」のことである。

「人間性の剥奪」という傾向は、科学「標本」としての大衆という表象も生み出した。この傾向が強化されると、「バクテリア」と結び付けられたり、さらにヒトラーに至ってはそれが「駆除」の対象となった（25-26頁参照）。またフロイトは、人間社会の原始的状態として大衆の中の「個人」をとらえた。そして、抑圧がなくなった（＝本能むき出しの状態の）大衆は、少数派のエリート階級によって制御されなければならないという

論理となった。（“[A] mob [...] has to be held down forcibly by a prudent superior class.” 29）

やや異なる特徴づけもなされた。大衆の想像力の欠如を表象するのに、大衆は事実やリアリズムと結び付けられる。想像力が不足する者たちは、ありのままのものしか知覚できない、という論理である。事実に対する執着・固着という点から、これがまさに当時の最先端テクノロジーのひとつである「カメラ」（Kodak）と結び付いていく⁷⁾。事実－視覚－カメラ－メカニズムという連鎖の対極にあるのが、複雑な思考を要する想像力である。そしてこれが伝統的な文化を支えてきたものとされる。「愚かな大衆（multitude）はうつろな写真のような目（photographic eyes）をもって、いたるところに存在している」と不平をもらす Yeats や、「芸術への欲望は少数派（small minority）に存していたのであるが、安価で迅速で確かな事実への渴望は公衆全般（public at large）に存在している」と述べる Lady Eastlake⁸⁾ が引用されている（31 頁参照）。

ケアリーはまた、社会主義の興隆とほぼ同時期に出現してきた写真／カメラに対して危機感を抱いた「芸術（家）」の反応について述べるベンヤミン（Walter Benjamin）を、次のように引用する。

With the advent of the first truly revolutionary means of reproduction, photography, simultaneously with the rise of socialism, art sensed the approaching crisis ... Art reacted with the doctrine of *l'art pour l'art*, that is, with a theology of art. (Cary 32)

民主化、大衆化の別の側面といってよい socialism の出現と同時期に登場するカメラに対して危機感を抱く art を、大衆社会とは対極に位置する活動ととらえられているのは明白であろう。その art は「芸術至上主義」

(*l'art pour l'art*) へと向かう。ケアリーはこれを補足しつつ、社会性やリアリズムを排除する形で、art は、カメラが代表するリアリズムではなく、大衆層の理解の及ばない抽象芸術へと向かったと述べている。付言するなら、様々に実験的な試みがなされたモダニズム芸術・文学も、ケアリーはこの延長線上に——つまり、大衆文化に危機感を抱いた芸術家・文学者による反応であると——とらえている。

概略を紹介してきたのはほんのいくつかの例にすぎないが、ケアリーはこのほかにもフォスター、ジョイス、ハクスレー、ムア、ロレンスなどに言及しながら、当時の文人／知識人たちが、さまざまに大衆を描いていること、そしてその目的は、自らと大衆の違いを鮮明にして大衆を「分離」するためであったことを論じている。この文脈の中にケアリーはリーヴィスの大衆文化批判をとらえ、芸術・文学を識別する能力を備えたマイノリティの置かれた窮状を訴えるリーヴィスに注目しているのである(9-10頁参照)。

こうしたさまざまな大衆の表象は、実体のない想像物に、ある種メタファーとしての特徴を付与しようとした知識人の試みであったとケアリーは結論しているのであるが、いずれにせよ、19世紀末から20世紀前半にかけて、それまでになかった新たな社会階層の登場に伴い、芸術・文化活動を彼ら少数派の知識人層の専有物としてとらえようとする言説があったことは確認できるであろう。

2. 文化論の系譜

本節では、文化(あるいは文化概念)に関して、前節でみたような比較的同時代的な傾向とは異なる、通時的な言説の流れに注目してみたい。

“culture”という語に着目し、その使われ方の変遷をたどりながら、英国社会思想史に鋭く切り込んだのは、もはや古典といってよいであろう、レイモンド・ウィリアムズ(Raymond Williams)の『文化と社会』(*Culture*

and Society, 以下 CS と略記) である。「culture という語の発展 (development) は、われわれの社会、経済、政治生活における変化に対する、重要かつ継続する反応の記録なのである」(3) と問題意識を提示するウィリアムズは、産業革命後の「新しいイングランド」社会を論じるエドマンド・バーク (Edmund Burke, 1729-97) を最初にとりあげる。フランス革命の影響を受けた 19 世紀初頭の行き過ぎた個人主義を批判するバークは、個別化され分離された個人の単なる集合体ではなく、人間諸活動の継続性や相互関連性を重視する「有機的な社会」(“organic society”) としての国家観を構想したとウィリアムズは述べる。このように国家／国民 (nation) を、個人の瞬間的な集合体としてではなく、「数的、空間的だけではなく、時間的にも広がりを持つ継続／連続の観念」(“the idea of continuity, which extends in time as well as in numbers and in space”. Burke からの引用, 11) としてとらえた。これは何世代にもわたって慎重に選択されるのであり、「長い時間の中においてのみ自らを開示する、民族の道徳的、市民的、社会的慣習によって」(ibid.) 作られるという。このバークの考えはすぐ後には“spirit of a nation”、さらに 19 世紀後半には“a national ‘culture’”、と呼ばれることになると指摘しているウィリアムズは、集団・共同体が継続的に醸成し形成する道徳的・社会的慣習や概念として、ここバークの思想に culture 概念の萌芽を見るのである。

産業革命後の産業主義システムを批判しつつ英国社会論を展開する思想家に注目するウィリアムズは、機械へと「服従させられる／おとしめられる」(“reduced”) 人間の醜さを指摘するロバート・サウジー (Robert Southey, 1774-1843) に着目する。産業主義批判言説の最初期の例としてウィリアムズはサウジーを取り上げているのだが、政府の機能／義務として「国民の道徳的向上」(“moral improvement of the people”, 24) を主張すると共に、文学の中に「人間性回復の効果」(“the humanizing effects of literature”, 25) を見出しているサウジーの姿を提示し、こうし

たサウジーによる文学の役割などについての様々な論点は、その後も引き続き議論され、19世紀思想の伝統になっていくと述べている。

ウィリアムズは続いてロマン派詩人に注目する。デモクラシーとインダストリーの時代、また政治的動乱の時代は社会的変革の時代でもあった。その一つの背景として、18世紀における中産階級の台頭に伴って、新興読者層が誕生したことに言及する（32-33頁参照）。文学の生産あるいは消費ということに関わって、作家とパトロンという従来の関係に替わり、作家と社会＝読者をつなぐ、文学の「市場」が出現してきた。読者大衆に対する作家の不満が顕著になったのはロマン派の時代だと述べ、キーツ、シェリー、ワーズワスらによる発言を紹介している（33頁参照）。こうした状況への反応（あるいは反発）として、作家は市場／読者大衆に替わって、観念としての「理想の読者」（“Ideal Reader”）を想定する。「国民精神が具現化されたもの」として、現実社会を超えたところに存すると想定された「基準」（“standard”）のような存在である。

He will continue to insist, in fact, on an Idea, a standard of excellence, the ‘embodied spirit’ of a People’s knowledge, as something superior to the actual course of events, the actual run of the market. (34)

ウィリアムズによれば、これが culture 概念の源流（source）のひとつとなる。この「卓越」の基準として「国民精神が具現化されたもの」は、世紀が進むにつれ価値の判断所／参照点（court of appeals）となっていったというのである（34頁参照）。

このこと背景には、すでに触れたように、文学が市場に委ねられ、商売（trade）となってしまふことへの不満と不安があったのである。1834年のトマス・ムーア（Thomas Moore）の言を引用しながら、文学が

大衆の判断に左右されることによって「基準の低下」（“lowering of standard”）が生じてしまうという危惧があり、したがって大衆と「教養ある少数」（the “cultivated few”）とを峻別しようとする傾向が存在していたことを述べている。ウィリアムズは、まだ culture という語の使い方が定まらない時代において、このようなムアの動詞的な使い方（=cultivate）は cultivation や culture などの語形変化につながっていくことから、culture という語が、「市場」（market）の対立物として成立してきたことも指摘している（35 頁参照）。

ウィリアムズはこの時代の作家・芸術家像の特徴にも触れている。変革の時代において、芸術家に特別の意味が付与されていく。「天才」（“genius”）という概念である。産業化・機械化という特徴を有する新しい社会が否定するもの——すなわち人間的経験や行為（human experience and activity）——を強調しつつ、普遍の本質的真実を把握・表現できる人物としての芸術家像が形づくられる。ワーズワスを引用しながら、芸術家は「自らを『生の革命』（“revolution for life”）をもたらすものとみなすようになった」と述べている（42）。さらには、シェリーの『詩の擁護』に言及しながら、「上級な現実としての芸術観」（“the idea of art as a superior reality”）を説き、芸術の優位性を主張するロマン派の言説を紹介している。（ウィリアムズは、こうした言説が産業主義批判の基盤になったという積極面を記述する一方で、その否定的な帰結として、芸術を孤立させ、想像力の働きを特定の活動に限定したがために、かえって芸術の持つダイナミックな機能を弱めたのだと指摘することを忘れていないことも確認しておきたい（43 頁参照））。

ウィリアムズはベンサムやコールリッジを論じるミル（John Stuart Mill, 1806-73）へと論を進める。産業革命後に中産階級のドクトリンとして機能した新しいシステムとしての功利主義（utilitarianism）は、——「最大多数の最大幸福」に表わされるように——多数派の意志に呼応するも

のであり、少数派を抑圧するのではないかとの懸念をミルは抱いた。『自由論』におけるミルの議論の中心は大衆に対する少数派の擁護であると次のようにウィリアムズは述べている。

The central concern, now, was with the preservation of the rights of individuals and minorities against Public Opinion and the democratic State. (56)

ここでミルはコールリッジの、特にその“clerisy”（＝知識人階級）という考えに有効性を見出すという。人間を、「精神的完成」（“spiritual perfection”）を目標として追求する存在としてみなしていないとして、ミルはベンサムを批判する（62頁参照）。ミルにとって、この精神的完成のための社会的状況／条件（social conditions）を cultivation——後の culture——として規定したのがコールリッジであった（62頁参照）。ウィリアムズは次のようにまとめて述べている。

We can now see that as a result of the changes in society at the time of the Industrial Revolution, cultivation could not be taken for granted as a process, but had to be stated as an absolute, an agreed centre for defence. Against mechanism, the amassing of fortunes and the proposition of utility as the source of value, it offered a different and a superior social idea. (62-63)

機械（文明）や価値の源泉としての功利に対抗するものとして、そして社会における人間の至高の状態として、「この Cultivation という一般的条件は、社会における人間の観察しうる至高の状態ととらえることができる（63）」と述べ、cultivation を考えるコールリッジは、これを社会に

において保持し拡張していく階級として clerisy の存在を確立していくべきだと提唱する（63 頁参照）。ウィリアムズは次のようにコールリッジを引用している。

A certain small number were to remain at the fountainhead of the humanities, in cultivating and enlarging the knowledge already possessed, and in watching over the interests of physical and moral science; being likewise the instructors of such as constituted, or were to constitute, the remaining more numerous classes of order [...] ; the objects and final intention of the whole order being these — to preserve the stores and to guard the treasures of past civilization, and thus to bind the present with the past; to perfect and add to the same, and thus to connect the present with the future; but especially to diffuse through the whole community, and to every native entitled to its laws and rights, that quantity and quality of knowledge which was indispensable both for the understanding of these rights, and for the performance of the duties correspond. (64)

過去の遺産や知識を保持し未来へとつないでいく、社会における少数派知識人の役割／機能について述べられているのが分かるであろう。

コールリッジの clerisy に似て、「文人としての英雄」（“hero as man of letter”）として「天才（genius）」をとらえたのはカーライル（Thomas Carlyle, 1795-1881）であった。カーライルは、社会のデモクラシーへの動きをレッセ＝フェール精神の現われとみる。自らの利益を自由に追求できる一方、秩序や統治は崩壊する。今日の見地からは極論とも思えるデモクラシー批判だが、当時、特に 1832 年の選挙法改正（Reform Bill）

でピークを迎える民主化の文脈においては、一定の正当性を持ち得たとウィリアムズは述べている（80頁参照）。時代のこのような動きに懸念を抱くカーライルは、支配階級としての貴族階級による統治の必要性を唱えるようになる。同時に、経済関係に拘束される産業社会（Industrialism）を批判するのに「文化の概念」を用いる。文人としての英雄が体現する価値が無視される社会状況として、産業社会をとらえて批判するのである。

Carlyle, even when he appealed to the leadership of the aristocracy and captains of industry, never failed to emphasize this other conception of a 'spiritual aristocracy', a highly cultivated and responsible minority, concerned to define and emphasize the highest values at which society must aim. (84)

社会が目指すべき至高の価値を体現すべき少数派として「精神的貴族階級」をとらえ、その状態を教養あるもの（cultivated）をとらえているカーライルを、ウィリアムズはこのようにまとめている。

マシュー・アーノルド（Matthew Arnold, 1822-88）は、culture を“a pursuit of our total perfection by means of getting to know, on all the matters which most concern us, the best which has been thought and said in the world”（Arnold, 5）と定義した。ウィリアムズは、アーノルドの『文化／教養と無秩序』におけるこのアーノルドの用語法、および定義が、これまで上で概観したような、またその後も今日に至るまで続いていくような思想の伝統に言葉を与えたのだと述べている（“Matthew Arnold's important definition, which at last gives the tradition a single watchword and a name”, 114）。ウィリアムズは、アーノルドの culture 議論はもっぱら人間の内面に第一の焦点を当てたものであるとの理解を

されるが、そうではなく、個人の集合体としての「完成」（“perfection”）を目指すものであり、したがって明確に「社会」を念頭に置いた議論であると論じている（118-9 頁参照）。かつそれは明確に産業主義批判と軌を一にするという（119 参照）。この文脈で興味深いのは、アーノルドが国家を「一般的完成」（“general perfection”）の仲介者（agent）ととらえているところだとウィリアムズは言う（119）。「光と権威の中心であり、『最良の自我』の器官」（“centre of light and authority, the organ of the ‘best self’”120）とアーノルドは国家を想定する。では誰がその中心を担うのにふさわしいのか。アーノルドは彼のよく知られた3つの階級——すなわち、Barbarians, Philistines, Populace——をそれぞれ分析し、そのどれもが十分でないと考える。現実の階級がどれも十分でないとすると、あらたな構成が必要となる。そこでアーノルドは、どの階級にも少数存在している「残滓」（“remnant”）あるいは「異分子」（“aliens”）と呼ぶ少数派に期待を寄せる。彼らは階級のイデオロギーや慣習にとらわれることなく、「人間味ある精神や人類の完成のための愛によって」（“by humane spirit, by the love of human perfection”, 121）導かれる人たちである。この少数派は、自らのうちに「最良の自我」（“best self”）を有しており、かつ、他の人物の内に眠る「最良の自我」を目覚めさせる能力も有している。そしてそれを覚醒させる方法は、教育や詩や批評を通してである。教育の基礎をなすのは、「世界で思考され書かれてきた最良のもの」——アーノルドの culture の定義であったことを想起しよう——である（121 頁参照）。「国家の創造に最良の個人の影響を具現化させること」（“the influence of this influence in the creation of a State” 122）を考えるアーノルドの構想を、あいまいであり非現実的であるといった批判があったことをウィリアムズは紹介しているが、産業主義という社会状況に対する批判を展開するにあたって、理想の社会／国家の創造が、「少数派」集団によって推進され、かつそれが「culture」の概念を色濃く帯

びたものであることを主張した思想家アーノルドを確認することはできないであろう。

その後ウィリアムズは、ラスキンやショー、ロレンス、T. S. エリオットらを取り上げて議論し、終盤の一章において「二人の批評家」と題し、I. A. リチャーズとリーヴィスを取り上げているのである。

おわりに

作家に対する評価の構築プロセスを考える上で、主要な批評家の評論活動とその影響力に注目することは必要な作業のひとつである。筆者が研究対象としてきたロレンスの研究に沿うならば、なぜリーヴィスの批評活動が大きな影響力を持ち得たのか、という問いに向き合うことであろう。リーヴィス批評の独自性の持つインパクトを跡付けていく必要性を認識しつつ、その一方で、ともすれば見逃されがちな、リーヴィスの批評と、時代思潮や精神的・思想的遺産との親和性の一端について「覚え書き」として書き留めようとしたものが本稿である。

産業社会が成熟してきた20世紀初頭の英国社会において文化の危機的状况を感知したリーヴィスは、文化の窮状に対処するために文学批評の重要性を説いたのであった。文学・芸術の鑑識眼を有し、文化を継承していくのは知的訓練を受けたマイノリティであるとリーヴィスは主張した。エリート主義との批判を招いたリーヴィスの文化論・文学論であったが、それは決して独善的で突出した文化論ではなく、それは英国社会文化思想のひとつの系譜に連ねることが出来るとともに、比較的近い時代の中でも共鳴する言説の存在を確認することができるのであった。遅くとも産業革命を経験した後の時代から、(用語としては確立していなかったとしても)文化概念と考えられる思潮が連綿として存在しており、それはやはり、機械産業社会、そして大衆民主社会に対する批判の言説

として続いてきたことを確認することができる。

もちろん、このことが即リーヴィスの文学批評実践の影響力に直結すると主張するものではない。これらの関連についての検証は今後の課題とするところである。しかしながら、一批評家の言論活動を同時代の、あるいは歴史的な文脈の中に相対的に布置する作業は、批評家の言論の影響を評価・検証するに際して一定の有効性をもちうるものだと考える。独創的な批評家も、まさに「伝統」から決して自由ではないのだ。

注

- 1) 本稿では、当該論考が収められた *For Continuity* (FC と略記する) をテキストとして使用する。
- 2) 「文化」のとらえ方や定義については必ずしも唯一合意されたものがあるわけではないことは言うまでもない。異なる時代によって違ったとらえ方もあれば、個人間で差異が存在することもある。現代では、人類学的な使い方に見られるように、人間の生活様式全般 (whole way of life) を指して使うことが多いように思われるが、リーヴィスの理解としては、後に見ていくアーノルドの定義に近く、人間活動全般ではなく、芸術や文学など、教養ある一定の層が創出し維持していくような活動を指して用いているようである。また、「文明」と「文化」の違いや関係などに関しては、松宮 (2014 年) が思想史の文脈において詳しく分かりやすくまとめている。
- 3) リーヴィスの影響を語る時に、「弟子」の存在に言及されることがあるが、リーヴィスから直接の指導を受けた英文学者・英語教師は多い。ケンブリッジ版のロレンス評伝のひとつを執筆している David Ellis もそのひとりである。リーヴィスについての著作を著わした Ellis はそこで、“A language is a cultural life, a living creative continuity.” というリーヴィスの言を伝えている (57)。Ellis の著書は、「リーヴィス主義」に接した人物の回想録／見解であり、リーヴィスのテキストをいわば二次的に吸収・理解しなければならない研究者が持ち得ない経験から発せられるものとして極めて興味深く、かつ貴重である。(もちろん、「リーヴィス主義者」ゆえの客観性／主観性などには注意が必要であることは言うまでもないが。) ここに Ellis が紹介しているリーヴィスのセンテンスは、

言語と文化の関係、また文化に求める重要な特徴である「連続」との関連性も凝縮されていて、リーヴィスの言語文化論の特徴を語るのに適切かつ有効なものに思われる。

- 4) 『文化と環境』においては、“... it is on literary tradition that the office of maintaining continuity must rest.” (2) という言い方も見られる。
- 5) Ellis は、この“discrimination”という語の使い方について、“Having clear ideas of literary value was what was known in the Leavis group as discrimination” (18) と解説している。
- 6) リーヴィスの英文科構想について筆者は別稿で少し論じたことがある。石原、「F. R. リーヴィスと英文学部の理想」を参照。
- 7) カメラという機械文明の典型的な形態については、ロレンスも批判的に反応していた。近代人・近代社会批判として、視覚のリアリズムに固執しすぎる近代人を批判するロレンスを想起することが出来る。例えば、*Phoenix* に収められた“Art and Morality”の中でセザンヌの絵画論を展開しつつ、セザンヌと違って、物事の本質に迫ることなく、「コダック」に代表される視覚情報のみからものごとの「リアルさ」を判断するような現代人を批判的にとらえている。例えば、次のようなセンテンスがある。“[Cezanne] begins to see more than the All-seeing Eye of humanity can possibly see, Kodak-wise.” (D. H. Lawrence, *Phoenix*, 524)
- 8) Elizabeth Eastlake (1809-93) は「イギリスの女流批評家」である。(研究社『英米文学辞典(第3版)』を参照。)

参考文献

- Arnold, Matthew. *Culture and Anarchy*. 1869; New Haven and London: Yale UP, 1994.
- Browne, Wynyard. “The Culture-Brokers” *London Mercury* (Summer 1933).
- Carey, John. *The Intellectuals and the Masses*. London: Faber and Faber, 1992.
- Ellis, David. *Memoirs of a Leavisite*. Liverpool: Liverpool UP, 2013.
- Johnson, Lesley. *The Cultural Critics*. London: Routledge & Kegan Paul, 1979.
- Lawrence, D. H. “Art and Morality” in *Phoenix*. 1936; Harmondsworth: Penguin Books, 1978.
- Leavis, F. R. *Education and the University*. 1943; Cambridge: Cambridge UP,

1979.

———. *For Continuity*. 1933; Freeport, New York: Books for Libraries Press, 1968.

———. *Valuation in Criticism and Other Essays*. Cambridge: Cambridge UP, 1986.

Leavis, F. R. and Denys Thompson, *Culture and Environment*, London: Chatto and Windus, 1933.

Priestley, J. B. "Thoughts on Dr. Leavis" *New Statesman and Nation* (Nov. 10, 1956).

Williams, Raymond. *Culture and Society*. 1968; London: The Hogarth Press, 1993.

石原浩澄「F. R. リーヴィスと英文学部の理想」『立命館法学』別冊 竹治進教授退職記念論集『ことばとそのひろがり (5)』立命館大学法学会、2013年。

船川一彦『英文科の教養と無秩序』英宝社、2012年。

松宮秀治『文明と文化の思想』白水社、2014年。

